魚河岸

芥川龍之介

去年の春の夜(よ)、――と云ってもまだ風の寒い、月の冴(さ)えた夜(よる)の九時ごろ、保吉(やすきち)は三人の友だちと、魚河岸(うおがし)の往来を歩いていた。三人の友だちとは、俳人の露柴(ろさい)、洋画家の風中(ふうちゅう)、蒔画師(まきえし)の如丹(じょたん)、――三人とも本名(ほんみょう)は明(あか)さないが、その道では知られた腕(うで)っ扱(こ)きである。殊に露柴(ろさい)は年かさでもあり、新傾向の俳人としては、夙(つと)に名を馳(は)せた男だった。

我々は皆酔っていた。もっとも風中と保吉とは下戸(げこ)、如丹は名代(なだい)の酒豪(しゅごう)だったから、三人はふだんと変らなかった。ただ露柴はどうかすると、足もとも少々あぶなかった。我々は露柴を中にしながら、腥(なまぐさ)い月明り

の吹かれる通りを、日本橋（にほんばし）の方へ歩いて行った。

露柴は生（き）っ粋（すい）の江戸（えど）っ児（こ）だった。曾祖父（そうそふ）は蜀山（しょくさん）や文晁（ぶんちょう）と交遊の厚かった人である。家も河岸（かし）の丸清（まるせい）と云えば、あの界隈（かいわい）では知らぬものはない。それを露柴はずっと前から、家業はほとんど人任せにしたなり、自分は山谷（さんや）の露路（ろじ）の奥に、句と書と篆刻（てんこく）とを楽しんでいた。だから露柴には我々にない、どこかいなせな風格があった。下町気質（したまちかたぎ）よりは伝法（でんぽう）な、山の手には勿論縁の遠い、――云わば河岸の鮪（まぐろ）の鮨（すし）と、一味相通ずる何物かがあった。……

露柴はさも邪魔（じゃま）そうに、時々外套（がいとう）の袖をはねながら、

快活に我々と話し続けた。如丹は静かに笑い笑い、話の相槌を打っていた。その内に我々はいつのまにか、河岸の取つきへ来てしまった。このまま河岸を出抜けるのはみんな妙に物足りなかった。するとそこに洋食屋が一軒、片側を照らした月明りに白い暖簾を垂らしていた。この店の噂は保吉さえも何度か聞かされた事があった。「はいろうか？」「はいっても好いな。」——そんな事を云い合う内に、我々はもう風中を先に、狭い店の中へなだれこんでいた。

　店の中には客が二人、細長い卓に向っていた。客の一人は河岸の若い衆、もう一人はどこかの職工らし

かった。我々は二人ずつ向い合いに、同じ卓に割りこませて貰（もら）った。それから平貝（たいらがい）のフライを肴（さかな）に、ちびちび正宗（まさむね）を嘗め始めた。勿論下戸（げこ）の風中や保吉は二つと猪口（ちょく）は重ねなかった。その代り料理を平げさすと、二人とも中々（なかなか）健啖（けんたん）だった。

この店は卓も腰掛けも、ニスを塗らない白木（しらき）だった。おまけに店を囲う物は、江戸伝来の葭簀（よしず）だった。だから洋食は食っていても、ほとんど洋食屋とは思われなかった。風中は誂（あつら）えたビフテキが来ると、これは切り味（み）じゃないかと云ったりした。如丹はナイフの切れるのに、大いに敬意を表していた。保吉はまた電燈の

明るいのがこう云う場所だけに難有かった。露柴も、——露柴は土地っ子だから、何も珍らしくはないらしかった。が、鳥打帽を阿弥陀にしたまま、如丹と献酬を重ねては、不相変快活にしゃべっていた。

するとその最中に、中折帽をかぶった客が一人、ぬっと暖簾をくぐって来た。客は外套の毛皮の襟に肥った頬を埋めながら、見ると云うよりは、睨むように、狭い店の中へ眼をやった。それから一言の挨拶もせず、如丹と若い衆との間の席へ、大きい体を割りこませた。保吉はライスカレエを掬いながら、嫌な奴だなと思っていた。これが泉鏡花の小説だと、任俠

欣(よろこ)ぶべき芸者か何かに、退治(たいじ)られる奴だがと思っていた。しかしまた現代の日本橋は、とうてい鏡花の小説のように、動きっこはないとも思っていた。

客は註文を通した後(のち)、横柄(おうへい)に煙草をふかし始めた。その姿は見れば見るほど、敵役(かたきやく)の寸法(すんぽう)に嵌(はま)っていた。脂(あぶら)ぎった赭(あか)ら顔は勿論、大島(おおしま)の羽織、認(みと)めになる指環(ゆびわ)、——ことごとく型を出でなかった。保吉はいよいよ中(あ)てられたから、この客の存在を忘れたさに、隣にいる露柴(ろさい)へ話しかけた。が、露柴はうんとか、ええとか、好(い)い加減な返事しかしてくれなかった。のみならず彼も中(あ)てられたのか、電燈の光に背(そむ)きながら、わざと鳥

打帽を目深(まぶか)にしていた。

　保吉(やすきち)はやむを得ず風中(ふうちゅう)や如丹(じょたん)と、食物(くいもの)の事などを話し合った。しかし話ははずまなかった。この肥(ふと)った客の出現以来、我々三人の心もちに、妙な狂いの出来た事は、どうにも仕方のない事実だった。

　客は註文のフライが来ると、正宗(まさむね)の罎(びん)を取り上げた。そうして猪口(ちょく)へつごうとした。その時誰か横合いから、「幸(こう)さん」とはっきり呼んだものがあった。客は明らかにびっくりした。しかもその驚いた顔は、声の主(ぬし)を見たと思うと、たちまち当惑(とうわく)の色に変り出した。「やあ、こりゃ檀那(だんな)でしたか。」――客は中折帽を脱ぎながら、

何度も声の主に御時儀をした。声の主は俳人の露柴、河岸の丸清の檀那だった。

「しばらくだね。」――露柴は涼しい顔をしながら、猪口を口へ持って行った。その猪口が空になると、客は隙かさず露柴の猪口へ客自身の罎の酒をついだ。それから側目には可笑しいほど、露柴の機嫌を窺い出した。

…………

鏡花の小説は死んではいない。少くとも東京の魚河岸には、未にあの通りの事件も起るのである。

しかし洋食屋の外へ出た時、保吉の心は沈んでいた。保吉は勿論「幸さん」には、何の同情も持たなかった。

その上露柴の話によると、客は人格も悪いらしかった。が、それにも関らず妙に陽気にはなれなかった。保吉の書斎の机の上には、読みかけたロシュフウコオの語録がある。——保吉は月明りを履みながら、いつかそんな事を考えていた。

（大正十一年七月）

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房
１９８７（昭和62）年２月24日第１刷発行
１９９５（平成７）年４月10日第６刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
１９９８年12月28日公開
２００４年３月９日修正